## エピローグ

「死んじゃったら私はわからないと思うけれど、残された家族は、今真帆が想像できる悲しみをずーっと持ち続けるのでしょう。それは、耐えがたい悲しみ、苦しみ、さみしさを与えることになるから、真帆はがんばる。そして、私と同じようにたたかっている人達に、勇気と希望をもってもらえるためにも、私は生きていなければならない」

真帆は、口ぐせのようにそう言っていました。

多分早くから自分の寿命はわかっていたのだと思います。でも、そんなそぶりはみじんも見せず、私達の前ではいつも笑って、最期の最期まで生きようと努力をしてくれました。真帆は苛酷な治療と2度の移植を受けたにもかかわらず、再々発をし、心身共に人間の限界を越えた厳しい状態の中で病と闘いながら、ありったけの力をふりしぼって生き続けようと頑張っていました。最後まで本当に光り輝いていました。

家族4人で祝った、最後のクリスマスとお正月。

「メリークリスマス、パパへ

私の医療費がたくさんかかってごめんね。

パパが校長先生になった時には、バーバリーのスーツをプレゼントしたね。

今回は高いものじゃないけれど気に入ってもらえたら嬉しいな」

と書かれたカードとスーツが2着。

私には、

「ママありがとう。着物が大好きなママには、毛皮のショール。お着物にもお洋服にも似合うと思うんだけど……

そして、ママの大好きな『北村英治』さんのCDをプレゼントします。

大好きなままchanへ。Mahoサンタより」

美希は真帆を気遣って、

「今はほしいものないよ」

と言っていたのですが、真帆はそれがとても気掛かりだったようです。お正月に出かけた店で、美希がひそかに気に入っていた靴をプレゼントしてあげていました。

ホテルニューオータニでむかえた2005年。

これが本当に家族4人でむかえる最後のお正月、そして最後の家族旅行になってしまいました。お正月のイベントをインターネットで検索し、時間のロスが無いようにと計画を立てて、私達を楽しませてくれました。

ホテルのイベントでは、ビンゴゲームで4人とも早々に景品をゲットしたり、特設屋台を楽しんだりして、みんなで大はしゃぎでした。

この時のホテルの対応には、心から感謝しています。バリアフリーのお部屋や、車椅子でもすごしやすい広めのお部屋を用意してくださり、とても快適に3日間をすごさせて頂きました。

そして、真帆から私への最後のプレゼント。

「ママ、ありがとう……。お仕事は絶対に辞めないでね」

真帆が天国へ旅立つ前夜に私に残してくれた最後の言葉です。きっと自分が旅立った後、仕事がないと私がだめになってしまうと、気遣ってくれたのだと思います。

真帆は永遠に私の中にいます。そして、真帆を愛してくださったすべての方の心の中にいます。 「真帆、あなたはいつまでもいつまでも私の最愛の娘だよ。

真帆、生まれてきてくれて本当にありがとう」

この場をお借りして、多くの皆様に心から感謝申し上げます。

真帆が10年間お世話になった甲南女子大学付属中高の同級生の皆さんが心をこめて折って下さった2000羽余りの鶴。真帆はこの折り鶴をいただき、本当に喜んでおりました。「1日も早く元気になって、みんなにお礼が言いたい。こんなステキな学友と共に学生生活を送れたことが私の誇りだわ。甲南女子に入学して本当によかった」と、病室に来て下さる方みんなに自慢しておりました。この気持ちを伝えられないまま旅立ったことが心残りだったと思います。私達家族より、心からお礼申し上げます。

皆様、本当にありがとうございました。

虹の千羽鶴をいただいてからの真帆は、皆様方の強い祈りを感じることができたのでしょう。心強いボディーガードが守ってくれているように、とても穏やかな日々を送ることができました。今は、天国より、皆様のお幸せを必ず見守っていることと思います。

あわせまして、生前真帆がお世話になりましたたくさんの方々に、心からお礼申し上げます。お一人お 一人の方に、お礼を申し上げなければならないのですが、書面で本当に申し訳ございません。

真帆は26歳の若さで旅立ってしまいましたが、4年にわたる闘病生活の間、治療中で面会できない

時以外、どなたも見舞ってくださらなかった日はほとんどありませんでした。

皆様の優しさに、心から感謝いたします。ありがとうございました。

本書を刊行するにあたり、多くの方々に大変お世話になりました。ありがとうございました。

そして、私達の願いを受けとめてくださり、ていねいに本作りを進めてくださいました久保則之代表は じめあけび書房の皆様に深く御礼申し上げます。

最後になりましたが、この本を読んでくださった方々はじめ日本中、世界中の皆様に心からお願いしたいことがあります。骨髄バンクへのご協力を是非お願いいたします。多くの患者さんの命を救うために力をお貸しください。

そしてもうひとつ。「医療者のための医療ではなく、患者のための医療」。本書がそのあたりまえのことの実現のための一助になれば幸いです。

2006年12月 山口 悦子